

進化経済学会ニューズレター No. 20
June 2006

進化経済学会事務局
〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 4-4-19
国際文献印刷社内 進化経済学会事務局
T:03-5389-6493 E:evoeco-post@bunken.co.jp



****記事****

第10回進化経済学会北海道大会を終えて
会長講演：マルクス=ヴェーバー問題の進化主義的転回
進化経済学会第III期第7回理事会・第IV期第1回理事会報告
第10回会員総会記録
2005年度下期部会活動報告
名簿訂正/新規入会者名簿
『進化経済学ハンドブック』編集作業報告
英文誌編集委員会から・『「博士論文」NOTES』のお知らせ
Call for Papers 進化経済学会第11回大会報告募集
サマースクール開催のお知らせ・オータム・コンファレンスのご案内

第10回進化経済学会北海道大会を終えて

北海道大会運営委員会 西部忠 (大会委員長)

江頭進 (副委員長) 吉地望 (事務局長)

平成18年3月25日、26日に第十回進化経済学会北海道(北海道大学)大会が開催された。大会までの一週間は天候が不安定であったが、大会期間中は幸運にも天候に恵まれた。当初は北海道札幌市での開催ということもあり、大会参加者は100名程度に留まるのではとの危惧もあったが、ふたを開けてみれば学会員104名、非学会員28名、また招待講演のみの参加者が20名を超えていたことから、合計で150名を越えた。また、セッション数は、ポスターセッション発表会、招待講演、会長講演を含めないで全部で18、報告数は54(ポスターセッションの報告数は14)という大きな大会となった。これもひとえに大会参加者・関係者の皆様のご協力、ご尽力のお陰である。ここに記して謝意を表したい。また、本大会には北海道大学21世紀COE「トポロジー理工学の創成」と社団法人北海道未来総合研究所からの協賛をいただいたことも付記しておきたい。

大会前に運営委員会では第十回記念大会ということもあり、いくつかの新たな試みを行うことで意見は一致していた。一つは大会論文集のCD化である。現在進化経済学会には500名を越える会員が登録されているが、会員全員に論文集を送るコストは大会運営費用を圧迫していた。そこで学会員へのサービスを低下させることなく、経

費を削減する方法としてCD化が進められた訳である。ニューズレターが発行される頃には皆様のお手元に届いているはずである。このような方式に対する評価が定まれば、次回以降の大会においてもCD化が行われ、定着していくと思われる。そしてこのことは今後の大会運営委員会に予算上の自由度を与えるに違いない。

二つめは大会出欠登録をWEB上で行ったことである。オータムコンファレンス、本大会と2回続けて実施したが、オータムるときよりも本大会の時のほうが遙かに登録率が高く、やはりまずはこのような方式を認知してもらうことが肝要であることを知った。継続的に実施し、認知を高めていくことが望まれる。この方法が今後も実施されれば、かなりの郵送費用と事務手続きを削減することができる。CDと同様にこちらも弾力的な大会運営に役立つに違いない。

三つめは理系の学会では定番であり、進化経済学会においても定着した感のあるポスターセッションの方式変更である。今まではポスターセッションは報告セッションとは独立に行われていたが、今回はセッションが一切ないポスターセッションのみの時間帯を設定した。参加者はポスターセッションとは別会場でオーディエンスに1分スピーチを行い、その後でポスター会場に移動して、1分間スピーチに興味関心を持

った人達の前で、発表するという方式をとった。このことにより、普段はセッションにだけ参加している参加者も含めて、ポスターセッションへ広く関心を持ってもらうことに成功した。評判のよかったこの方式が今後も継続されることが望まれる。

本大会のメインテーマは、オータムコンファレンスと同じく、「進化経済学の再定義- 学の分岐と融合」とした。大会二日目の午前には、スティーヴ・フリートウッド氏(Steve Fleetwood)とサミュエル・ボールズ氏(Samuel Bowls)をお招きしてこのテーマに関する講演をしていただいた。



フリートウッド氏

まず、フリートウッド氏は”Institution and Social Structure”と題して、制度と社会構造の関係を批判的実在論の視点から考察した。社会的存在を主体、社会構造ないし制度、行為ないし結果という三層にわけ、制度は人間行為を調整し、標準化し、相対的に予測可能にする社会的ルールの体系であり、それは行為の固定化されたパターン(習慣やルーティン)とも、社会構造とも異なると論じた。

次いで、ボールズ氏は、”The Co-evolution of Individual Preferences

and Social Institutions”と題するパワーポイントによるプレゼンテーションで、利他的な遺伝形質が群選択圧の影響下で進化するかという問題を提起し、多層的選択モデルのエージェント・ベースト・シミュレーションによる実験結果を紹介してくれた。ボールズ氏によれば、戦争のような集団間抗争の頻発こそ、集団に利益をもたらす利他的行為と、食物分配のような集団レベルの制度的構造が共進化させるための主要な要因であるという。二人の講演はいずれも英語で行われ、通訳はなかったものの、90名以上の聴衆者が会場を埋め、講演後の質疑応答も大変活発なものであった。



ボールズ氏

二日目最後に、新会長である八木紀一郎氏が「マルクス・ウェーバー問題の進化論的転回」という会長講演を行った。パワーポイントを使った非常にわかりやすい説明に聴衆も聞き入っていた。

閉会式では大会運営委員長西部忠が「進化経済学の再定義」というテーマで始まった本大会を総括し、大きなトラブルもなく充実した二日間を終えることができた。

マルクス=ヴェーバー問題の進化主義的転回*

(会長講演原稿のあとがき)

八木紀一郎

*講演の原稿は『進化経済学論集』第10集(冊子およびCD-Rom版)の464-471ページに掲載している。1箇所訂正したいのは、p.469の2つ目の引用で、これは『倫理』論文への改訂付加部分ではなく、削除部分であったから、同ページ8-10行目の文章は、「最初のアルヒープ論文には、次のような脱出不可能性を説く注すら存在した。」と変更したい。

1. 私が大学に入った1965年頃は、日本のアカデミズムにおけるマックス・ヴェーバー熱が最高潮に達していた時代ではないかと思う。狭義の経済学の世界では、「マルクス経済学」に対する「近代経済学」の優位が1960年代に確立しはじめていたはずだが、一般には、「近代経済学」は思想には関係ないテクニカルな学問だとみなされていた。したがってマルクス主義に拮抗するアカデミズムの軸は、まづヴェーバーであると考えられていた。マルクス=ヴェーバー問題は、私にとってなつかしい出発点である。

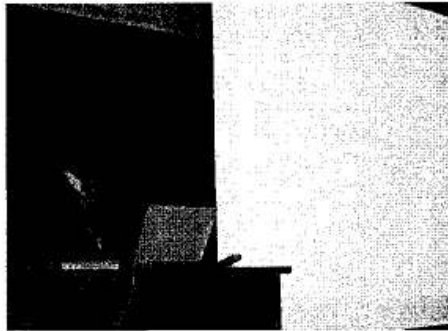
2. なぜ講演でマルクス=ヴェーバー問題を取り上げたかという点、日本の社会科学や歴史学を含む人文科学で、進化主義的な思想の浸透を妨げている一つの障碍が、この問題の理念主義的な理解にあるのではないかと思ったからである。主知主義的理解といってもよい。ヴェーバーの方法論では、社会現象を説明するために、行為の「意味連関」から「理想型」が構成されるが、それを評価する基準＝「価値」は研究対象の外から与えられるとされる。ヴェーバーは、

研究者は人格的主体として価値的な関心をもって問題を設定し、研究の成果が政策形成のための基礎になることを認めるが、研究者の課題自体は主知的な類型構成とそれとの比較による現実の乖離の確定という作業を「没価値」的に行なうことであるとしている。評価基準＝価値自体は実践的な政策と同様に、主体の選択に委ねられている。日本社会の現実がどうであれ、近代社会における価値理念を評価基準として保持しようとする「近代主義者」がヴェーバーに拠り所を求めたのも、ヴェーバー方法論のこのような構造によるものであろう。

マルクスの唯物史観は、行為を主知的な「意味」から説明するものではないから、ヴェーバーの方法論とは異なっている。しかし、G・ルカーチの階級意識論がヴェーバーの「理想型」に類似した主知主義的な構成物であることを想起すべきである。多くのマルクス主義者も実質上ヴェーバー的な主知主義的理念論を採用していたのではないだろうか。他方、多くのヴェーバー主義者が、マルクス主義を主知的に解釈して、それと折り合いをつけていたのではないだ

らうか。

マルクスもヴェーバーもとくに忘れ去られているかに見える現在の社会科学・人文科学の「ポスト・モダン」的な思想状況も、その延長にあるのではないだろうか。要するに、実践的関心が衰弱し、価値の世界における「神々の闘争」が死滅したため、「理想型」の主知的構成という方法が一人歩きしてトリビアリズム（瑣末主義）に陥った状況である。



八木新会長

3. 「進化主義」は「理想型」的な概念構成を一概に否定するものではない。しかし、変異を内在する多数主体の相互作用と頻度依存的・経路依存的な変化は、そのような孤立的な「類型」論では理解できないと考える。また、「進化主義」は、外在的な価値によって価値判断や実践を要求するような「政治主義」も拒否する。しかし、トリビアリズムの代わりに、政策的ニヒリズムに陥る危険がある。進化的プロセスのなかにある社会の内部の営為として社会科学的研究が存在するという事は、社会の再生産上の課題への貢献もまた研究者の責務の一

つであることを意味する。このことを進化主義的な社会学者は銘記すべきである。

4. 講演では、ヴェーバーの方法論のなかで「非合理性」から「価値合理性」の概念が生まれていく過程を吟味することによって、ヴェーバーには主知主義を超えて「思わざる結果」を把握しようとする見方があり、それが経済現象と社会的事象の関連を問う彼の膨大な研究と結びついていると論じた。

ヴェーバーは、「進化論」を「唯物史観」と重ねあわせてもっぱら経済（競争）による「淘汰」論として把握し、それに欠けている「変異」の発生・定着を宗教などの社会的・文化的事象に求めた。ヴェーバーは自ら意識せずに、「変異」と「淘汰」、そして「保存」からなる社会進化論の構築につとめていたのである。いいかえれば、ヴェーバーには社会と経済の相互作用を基礎とした進化的な社会変動のビジョンがあった。それは、マルクスの唯物史観に対する建設的な批判であった。ヴェーバーを主知主義的にではなく、進化主義的に読みかえることは不可能ではないだろう。ヴェーバーの仕事が過去のもののみならず、誰もが必要に応じて有用な概念・類型をつまみ食い出来るようなものと考えられることは、彼を貶めることであると思う。マルクスについても同様のことが言える。進化的な社会学者は、マルクスとヴェーバーの双方が有していた、全人類史におよぶ広大な視野と、現代批判の意識を受け継ぐ必要があるだろう。

進化経済学会第 III 期第 7 回理事会・第 IV 期第 1 回理事会報告

1. 2006 年 3 月 25 日 12 時 20 分から 13 時 30 分、北海道大学ファカルティハウス会議室にて、進化経済学会第 III 期第 7 回理事会・第 IV 期第 1 回理事会が合同開催された。第 III 期理事会としては、出席 13 理事、委任 13 理事、会長、副会長、2 監査委員出席、第 IV 期理事会としては、出席 16 理事、委任 11 理事、会長、副会長出席でいずれも成立した。

2. 最初に西本和見選挙管理委員（長尾伸一選挙管理委員長代理）から昨年 10 月に実施された第 IV 期役員（2006 年 4 月 1 日から 3 年任期）選挙の結果の報告があった。

（氏名については、会員総会の報告を参照。「学会ニューズレター」でも既報）

3. 第 IV 期常任理事および監査委員の候補について、前日の常任理事会での審議を経た候補リストを八木次期会長が提案し、修正なしに採択された。なお、事務局理事の任命は現時点では不必要という見解が示された。

【常任理事 10 名】

有賀裕二、依田高典、磯谷明德、植村博恭、江頭進、塩沢由典、清水耕一、西部忠、藤本隆宏、吉田雅明

【監査委員（理事会から委嘱）】

安孫子誠男（千葉大学・法経）
服部茂幸（福井県立大学）

【その他】

また、経済学会連合評議員（2 名）として、西山賢一理事の交代希望にしたがって、吉田雅明理事を送ることとした。国際英文誌の編集長に、有賀裕二理事が就

任する。

4. 会員状況について八木副会長から報告があった。2005 年 8 月 31 日時点では、個人会員 408 名、院生会員 88 名、賛助会員 2 アドレス、招待会員 2 名、計 500 会員であった。

その後の退会者と 9 月理事会での 5 名の入会資格認定者を加え、さらに本日の理事会での入会資格審査者 9 名を加えると、2006 年 25 日現在での会員は、個人会員 414 名（休会 1 名を含む）、院生会員 95 名、その他かわらずで、合計 513 名になる。しかし、年度末大会希望者が 5 名（いずれも個人会員）あるので、3 月 31 日には合計 508 名になる。なお、さらに、3 月 31 日までに会費 4 年分滞納による会員資格喪失者が 15 名出ると見込まれる。

引き続き入会希望者のリストにより、以下の 9 名を有資格者として認定した。

井上研司（日本総合研究所研究事業本部）、篠田朝也（滋賀大学経済学部）、都築栄司（早稲田大学・院・経済学研究科）、井上智洋（早稲田大学・院・経済学研究科）、大東正虎（関西大学・院・社会学研究科）、徳丸夏歌（京都大学・院・経済学研究科）、後藤司（横浜国立大学・院・国際社会科学研究科）、橋本敬（北陸先端科学技術大学）、奥瀬喜之（専修大学商学部）。

第 6 回理事会以降の退会者は海野八尋会員、年度末退会者は、御船洋、高島博、高木彰、豊田謙二、畑仲克巳の 5 会員である。

なお、会費滞納者については再度通知して、個別事情なども徴したうえで、事務的

に除籍措置をとってよいことが確認された。
 (学会運営にご協力いただいた方には、
 今後は外部からご支援いただくようお願い
 することになる。)

5. 会計状況の報告に代えて、翌日の会員
 総会に提出される平成16(2004)年
 度の決算報告が示された。引き続き平成1
 8(2006)年度の予算案の原案が示さ
 れたが、予備費の項目を新設するという提
 案がなされ、それを取り入れて予算案を会
 員総会にはかることとなった。(予算は本
 ニューズレターに別掲。予備費は、ゲネシ
 ス3の刊行が実現する場合、および『進化
 経済学ハンドブック』の編集費などの使途
 を考慮して設定された。)

6. 第10回大会の進行状況が西部大会運営
 委員長から説明された。北海道大学の21
 世紀COEプログラム「トポロジー理工学の
 創生」および社団法人「北海道未来総合研
 究所」からも協賛団体として援助を受けて
 いる。また、京都大学で開催される第11回
 大会(2007年3月24-25日)について、吉
 田和男副会長から説明があった。(翌日の
 会員総会でオータムコンファレンスの開催
 日を2006年9月30日とすることがアナウ
 ンスされた。オータムコンファレンス前の
 サマースクールも準備したい。)

7. 国際英文誌 EIER について、Socio-
 Econophysics を特集した Vol.2-2 が3月末
 に印刷され4月はじめに配布されることが、
 目次とともに報告された。編集委員会では、
 Notes のジャンルに、進化経済学の領域で博
 士学位を取得した若手研究者の研究紹介を
 受け付けることとしたので、本人だけでなく、
 研究指導をしている会員も含めてご協
 力をいただきたいというアナウンスがあっ

た。科研費出版助成の成否は、5月頃には
 判明の見込み。

8. 『進化経済学ハンドブック』の編集状
 況が、磯谷委員から、装丁案と内容紹介を
 配布のうえ説明された。刊行は9月を予定
 している。会員割引も設定される学会の編
 集出版物であるので、今後校正などのため
 の交通費の補助を予備費からおこなうこと
 が承認された。

9. 経済学会連合について有賀理事(経済
 学会連合評議員)からその活動内容につい
 て説明があった。その他、第1回社会シミ
 ュレーション・ワールドコンgres(8月
 京大)への協賛、韓国 KOSIM(科学政策お
 よびイノベーション学会)との提携など。

10. 部会報告は省略し、「学会ニューズ
 レター」でおこなう。

第10回会員総会記録

1. 2006年3月26日13時半から1
 4時半まで、北海道大学社会科学総合教育
 棟 W203 教室で進化経済学会の第10回会
 員総会が開催された。金子勝会員が議長を
 つとめた。

2. 会員状況について八木副会長から報告
 があった。昨日の第7回理事会での入会資
 格審査者9名を加えると、2006年3月26
 日現在での会員は、個人会員414名(休会
 1名を含む)、院生会員95名、賛助会員2
 アドレス、招待会員2名で、合計513名に
 なる。しかし、年度末退会希望者が5名(い
 ずれも個人会員:氏名は理事会記録に)あ
 るので、3月31日には合計508名になる。
 なお、さらに、3月31日までに会費4年
 分滞納による会員資格喪失者が15名出る

と見込まれる。

引き続き、前日の第7回理事会で会員有資格者として認定された9名と、昨秋の第6回理事会で有資格者と認定された5名（これについては事後承認となる）の入会希望者の入会を一括承認した。

【第6回理事会審査分】

鄭裕勲（京都大学・院・経済学研究科）、田口雅弘（岡山大学・経済学部）、栗田寛之（横浜国立大学・院・国際社会科学研究所）、内橋賢悟（流通科学大学）、藤本隆宏（東京大学・経済学研究科）

【第7回理事会審査分】

井上研司（日本総合研究所研究事業本部）、篠田朝也（滋賀大学経済学部）、都築栄司（早稲田大学・院・経済学研究科）、井上智洋（早稲田大学・院・経済学研究科）、大東正虎（関西大学・院・社会学研究科）、徳丸夏歌（京都大学・院・経済学研究科）、後藤司（横浜国立大学・院・国際社会科学研究所）、橋本敬（北陸先端科学技術大学）、奥瀬善之（専修大学経営学部）。

3. 西本和見選挙管理委員（長尾伸一選挙管理委員長代理）から昨年10月に実施された第IV期役員（2006年4月1日から3年任期）選挙の結果の報告（氏名については、「学会ニューズレター」でも既報）があり承認された。

【会長】八木紀一郎

【副会長】吉田和男

【理事】浅田統一郎、荒川章義、有賀裕二、依田高典、磯谷明德、植村博恭、宇仁宏幸、江頭進、岡村東洋光、海蔵寺大成、金子勝、澤邊紀生、塩沢由典、清水耕一、須藤修、瀬地山敏、高安秀樹、谷口和久、丹沢安治、出口弘、長尾伸一、鍋島直樹、西

部忠、萩原泰治、平野泰朗、藤本隆宏、宮本光晴、山田鋭夫、吉田雅明、若森章孝

4. 前日の理事会で決定された第IV期常任理事と監査委員の委嘱会員について、八木次期会長からの報告があった。

【常任理事10名】

有賀裕二、依田高典、磯谷明德、植村博恭、江頭進、塩沢由典、清水耕一、西部忠、藤本隆宏、吉田雅明

【監査委員（理事会から委嘱）】

安孫子誠男（千葉大学・法経）

服部茂幸（福井県立大学）

【その他】

また、経済学会連合評議員（2名）として、西山賢一理事の交代希望にしたがって、吉田雅明理事を送ることとした。また、国際英文誌の編集長に有賀裕二理事が就任する。5. 谷口監査委員から平成16（2004）年度の決算の監査報告がなされ、決算書を承認した。引き続き、澤邊理事から平成18（2006）年度の予算案が説明され、これも承認された。（予算は本ニューズレターに別掲）

6. 第10回大会の進行状況が西部大会運営委員長から説明された。3月の北海道での開催ということで心配したが、参加者は会員100名以上、非会員も含めて参加者は150名を超えているとのこと。また北海道大学の21世紀COEプログラム「トポロジー理工学の創生」および社団法人「北海道未来総合研究所」からも協賛団体として援助を受けている。引き続き、京都大学で開催される第11回大会（2007年3月24-25日）について、吉田和男副会長から説明があり、オータムコンファレンスの開催日を2006年9月30日とすることがアナウンスされた。オータムコンファレンス前のワークシ

ヨップ (サマースクール) も準備したい。

7. 国際英文誌 EIER について, Socio-Econophysics を特集した Vol.2-2 が3月末に印刷され4月はじめに配布されることが, 目次とともに報告された。編集委員会では, Notes のジャンルに, 進化経済学の領域で博士学位を取得した若手研究者の研究紹介を受け付けることとしたので, 本人だけでなく, 研究指導をしている会員も含めてご協力をいただきたいというアナウンスがあった。科研費出版助成の成否は, 5月頃には判明の見込み。

8. 『進化経済学ハンドブック』の編集状況が, 磯谷委員から, 装丁案と内容紹介を

配布のうえ説明された。刊行は9月を予定している。会員割引も設定されるが, 機関購入にもご協力いただきたい。

9. 経済学会連合について有賀理事 (経済学会連合評議員) からその活動内容について説明があった。その他, 第1回社会シミュレーション・ワールドコンgres (8月京大) への協賛, 韓国 KOSIM (韓国科学政策およびイノベーション学会) との提携など。

10. 部会報告は省略し, 「学会ニューズレター」でおこなう。

以上 (文責: 八木紀一郎)

進化経済学会 平成18年度予算

(平成18年4月1日 ~ 平成19年3月31日)

(単位: 円)

収入予算		支出予算	
概要	18年度予算額	概要	18年度予算額
前年度繰越	3,500,000	大会費	1,500,000
会費	4,455,000	英文誌編集刊行費*	2,000,000
(内訳)		通信費	200,000
正会員	3,960,000	交通費	200,000
(396名)		事務雑費	50,000
院生会員	445,000	謝金	40,000
(89名)		送金手数料	20,000
賛助会員	50,000	会議費	100,000
(1団体)		印刷費	200,000
		事務委託費	400,000
		国際交流費	100,000
		部会補助費	250,000
		経済学会連合	35,000
		予備費	1,500,000
		小計	6,595,000
		平成19年度への繰越	1,360,000
総計	7,955,000	総計	7,955,000

*英文誌編集刊行費内訳

直接出版費 150万円, 欧文校閲費 33.6万円,
海外レフェリー郵送費 0.4万円, 郵送費 16万円

2005年度下期部会活動

非線形問題研究部会

代表：有賀裕二（中央大学商学部）
幹事：浅田統一郎（中央大学経済学部）、
吉田雅明（専修大学経済学部）
小田宗兵衛（京都産業大学経済学部）

階の31101号室
講師 青木正直氏（UCLA名誉教授）
論題 NOT MORE SO: SOME EXAMPLES
FROM MACROECONOMIC MODELS

進化経済学会非線形問題研究部会 2005年
度 NO.2-NO.3
中央大学企業研究所共催
日時 2005年11月28日（月）15:30-18時
場所 中央大学多摩キャンパス2号館4階
研究所会議室2

シンポジウムの開催

専修大学社会科学研究所と非線形問題研究
部会の共催で、下記のシンポジウムを開催
した。

NO.2 15:30-17:00
講師 BERTRAM SCHEFOLD 氏
（フランクフルト大学経済学部教授、前ヨ
ーロッパ経済思想史学会会長[2000-02]）
論題 JOINT PRODUCTION: TRIUMPH OF
ECONOMIC OVER MATHEMATICAL
LOGIC?（結合生産：経済学ロジックの数学
的ロジックに対する勝利）
NO.3 17:00-18:00 [風邪のため中止とな
りました。]
講師 青木正直氏（UCLA名誉教授）
論題 NOT MORE SO: SOME EXAMPLES
FROM MACROECONOMIC MODELS

進化経済学のこれから - EIER合評
会をかねて
専修大学社会科学研究所共催
日時 2005年7月23日（土）13-17時30
分
場所 専修大学神田校舎1号館13A会議
室

1. EIERの目指すところ 寄せられた
GREETING, MANIFESTOについて 塩沢由
典（大阪市大）
2. EIER1・2号掲載論文の紹介と論評
 - (1) ADAM SMITH AND COMPETITIVE
EQUILIBRIUM (R.CHANDRA) 評者：石
塚良次（専修大学）
 - (2) BOTTLENECK MONOPOLIES AND
NETWORK EXTERNALITIES IN
NETWORK INDUSTRIES (T.IDA) 評

進化経済学会非線形問題研究部会 2005年
度 NO.3[再設定]
日時 2005年12月22日（木）15-17時
場所 中央大学後楽園キャンパス3号館11

- 者：鄭裕勲（京都大学・院）
- (3) MANAGEMENT MODEL FOR TECHNOLOGICAL CHANGE AND SUSTAINABLE GROWTH (S.SAKAKI)
 評者：富澤拓志（産業技術総合研究所）
- (4) POPULATION THINKING. PRICE'S EQUATION AND THE ANALYSIS OF ECONOMIC EVOLUTION (E.S.ANDERSEN) 評者：松前龍宜（東工大・院）
- (5) WHY IS ENVIRONMENTAL POLICY NOT MARKET-BASED? (T.OKA) 評者：在間敬子（専修大学）
- (6) A STUDY ON THE CONSISTENCY

- BETWEEN EMPIRICAL STUDIES AND GROWTH MODELS WITH DEMAND SATIATION AND STRUCTURAL CHANGE (T.MATSUMAE) 評者：有賀裕二（中央大学）
- (7) SOME COMMENTS ON THE METHODOLOGICAL PRINCIPLES OF NELSON AND WINTER'S EVOLUTIONARY THEORY (P.EPARVIER) 評者：小山祐介（東工大）
3. EIER の今後の予定、日本の進化経済学のこれから 八木紀一郎（京都大学）
 （文責：有賀裕二）

九州部会

代表者：岡村東洋光（九州産業大学）
 運営委員：磯谷明德（九州大学）
 平野泰郎（福岡県立大学）

（藤原書店、2005. の第2章）

担当：山田鋭夫

第34回研究会

日時 2005年7月9日（土）
 会場 九州産業大学1号館7階中会議室
 13時30分～14時50分 岡本哲史（九産大）
 「ラテン・アメリカが警告するもの
 ーチリの事例を中心にー」
 注 報告内容；内橋・佐野編『ラテン・アメリカへ警告する』（2005年、新評論）の企画趣旨、個別の内容紹介
 休憩 14:50～15:00pm
 15:00～17:00pm 報告者：
 15時00分～17時00分 ロベール・ボワイエ
 （仏；EHSS 研究部長ほか）
 「How and Why Capitalismus Differ?」
 使用言語は英語を予定。なお、山田鋭夫
 訳『資本主義 vs 資本主義』

第35回研究会

日時 2005年8月6日（土）
 会場 九州産業大学1号館9階
 経済学部小会議室
 13時30分～15時00分 報告者：高田実
 （九州国際大学）
 「近代イギリスにおける相互扶助とフィラン
 スロピー～国際比較の視点から～」
 休憩 15:00～15:20pm
 15時20分～16時50分 報告者：島浩二
 （阪南大学）
 報告論題「イギリス住宅改良運動における相
 互扶助と慈善」
 休憩 16:50～17:00pm
 17時00分～17時30分 打ち合わせ
 担当：岡村東洋光

第36回研究会

日時 2005年11月26日(土)

会場 熊本県立大学総合管理学部

大演習室

13時00分～14時45分

荒川章義(九州大学)

「制度経済学とその哲学的基礎」

休憩 14時45分～15時00分

15時00分～16:45分

磯谷明德(九州大学)

「制度経済学のフロンティア」

16時45分から17時00分 部会総会

担当:久間清俊

(文責:岡村東洋光)

現代日本の経済制度研究部会

代表:平野泰朗(福岡県立大学)

幹事:宇仁宏幸(京都大学)

磯谷明德(九州大学)

第21回 研究部会(横浜国立大学・魅力ある
大学院イニシアチブとの共催)

日時 2006年3月18日(土)

会場 横浜ランドマーク・タワー18階

報告・Tsukasa Goto (Yokohama National
University) "Occupation Tenure Effect in the
Japanese Labor Market"

・Sebastien Lechevalier (EHESS, Tokyo
University) "Prices, Wages and Mark-up: An
Analysis of the Deflation in Japan"

・Lei Song (Beijing University)
"Between Collaboration and Competition:
Changing Technical Foundation of Japanese-Sino
Economic Relationship"

第22回 研究部会

日時:2006年5月21日(日)

場所:恵比寿・日仏会館 601号室(6F)

報告・ロベール・ボワイエ(CEPREMAP, フ
ランス)「日本の失われた10年と困難なニュー
ディール」Robert BOYER "Japon : de la
décennie perdue à un improbable New Deal"

・宇仁宏幸(京都大学)「90年代日本と米国の
構造変化と資本蓄積」

他に、部会有志による「90年代日本の経済

体制」研究会が以下の活動を行う。

第3回 研究会

日時:2月18日(土) 13時～17時

場所:京都大学総合研究棟101演習室

報告・原田裕治(名古屋経済大学)

「産業構造の変化の多様性—多変量解析に
よる類型化の試み」

・中原隆幸(四天王寺国際仏教大学)

「文献紹介:バルビエ・テレ著『フランスの
社会保障』を読む—レギュレーション・

アプローチによる新しい社会保障制度分析の
試み」

第4回 研究会

日時 4月22日(土)

場所 阪南大学 淀屋橋サテライトオフィス

ス

テーマ

「池田 毅氏著『経済成長と所得分配』(日
本経済評論社)を読む」

評者

鍋島直樹氏(名古屋大学)

藤田真哉氏(京都大学・院)

なお、部会有志による「90年代日本の経済
体制」研究会は、2006年5月より本部会
に統合され、全員参加の研究会となった。

(文責:平野泰朗)

制度とイノベーションの経済学部会

2005年度下期は、当部会を中心に組織した
2002-05年科研費補助金助成共同研究「国境
を越える地域ガバナンス：EU諸地域の先行例
を中心とした比較研究」（基盤研究(A) (1)、
課題番号14252007, 研究代表者：若森章孝）の
最終年であり、この共同研究のために通常の
部会研究会は行われなかった。上記共同研究
の方は、2005年12月3日（土）に同志社女子大

今出川キャンパス（ジェームズ館）に研究会
を開催し、蓮見雄氏に招待講演「EU拡大後の
欧州秩序とボーダー・リージョンの役割」を
行ってもらった後、報告書作成のための研究
会と打ち合わせをおこなった。なお、共同研究
の成果については、2006年度に科研費補助金
の出版助成の申請を行う予定である。

(文責：清水耕一)

名簿訂正（訂正事項のみ記載）

逸見 彰彦

李 皓

鈴木 正俊

酒井 信

Aliya Kantarbayeva

村山 晴彦

川端 勇樹

岡本 隆

武田 満彦

高橋 達二

山田 鋭夫

室田 武

呂 守軍

中村 守

角南 篤

野崎 道哉

木村 大成

木村 雄一

梁 峻豪

新規入会者

会員名	フリガナ	郵便番号	送付先住所	所属先
井上 研司				
篠田 朝也				
都築 栄司				
井上 智洋				
大東 正虎				
徳丸 夏歌				
後藤 司				
橋本 敬				
奥瀬 喜之				

『進化経済学ハンドブック』編集作業報告 (2005年度)

進化経済学ハンドブック編集委員会

委員長 塩沢由典

副委員長 清水耕一・磯谷明德・八木紀一郎

本委員会は、福井県立大学での第8回進化経済学会会員総会(2004年3月28日)において、『進化経済学ハンドブック』の作成を学会全体の事業とすることの承認を受けた後、2006年3月21日における第18回編集会議(大阪)をもって、2年間にわたる編集委員会全体での作業について一応の終了をみました。

すでに予定した原稿の入稿も完了し、現在は共立出版において組版を作成中の段階にあります。

原稿の執筆にご協力いただいた会員の皆様には、編集委員会より心より御礼を申し上げます。また近々、校正の作業に入ることになります。執筆者の皆様には、速やかに校正の作業を完了していただきますよう併せてお願い申し上げます。

さて『進化経済学ハンドブック』に関して、会員の皆様にお知らせするのは以下の通りです。

①『ハンドブック』の構成

Part 1 理論/学説(概説(塩沢由典稿)を含む)

Part 2 事例

Part 3 用語集

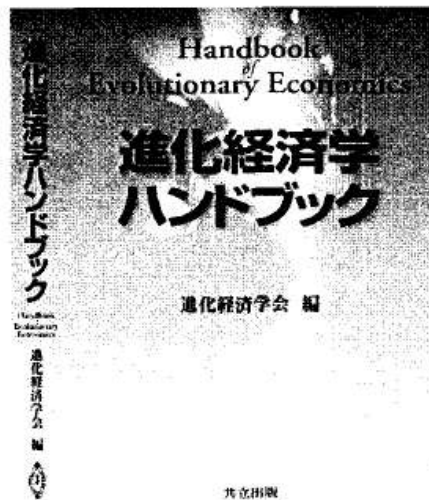
A5判、総頁で650頁ほどになる予定。

②刊行時期

2006年9月30日の京都大学でのオータム・コンファレンス時までの刊行を予定しています。

③価格は、現状では5000円台から6000円台になる予定です。会員の皆様には2割引きで販売致します。また、会員の皆様には、図書館等、所属機関での購入を促していただきますようお願い致します。

④『ハンドブック』のカヴァー・デザイン案としては、次のものが提案されています。



<<英文誌編集委員会から>>

EIER 編集委員会委員長 有賀裕二

Evolutionary and Institutional Economics Review の第 2 巻 (2 号) が平成 18 年 3 月末日に無事刊行され会員に配布されました。なお、平成 18 年 4 月、八木紀一郎会長就任に伴って、有賀がジャーナル編集委員会委員長を引き継ぎました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

八木紀一郎編集委員長の強力な指導の下で諸委員の集約的な活動によりジャーナル運営にあたっての基礎的な事項はすべて確立しております。編集委員会本体のほか、国内外の editorial board members からも大変好意的な協力をいただいております。最近では海外からの一般投稿も毎月数件あり次第に知名度が浸透している感があります。また、昨年度内に八木委員長のご努力により Journal of Economic Literature の EconLit とのリンクも実現されました。EconLit とのリンクは下記 URL とおりです。

http://www.econlit.org/journal_list.html

をご覧ください。

本誌は国より進化経済学会の国際的貢献を意図して刊行されたものですが、同時に、本誌継続を強化するために日本学術振興会の刊行助成金を得る努力が必要です。昨年度の申請の助成審査では、外国でのプレゼンスが弱いと指摘を受けておりますので、さらに海外の契約数を増やすなどの努力をせねばなりません。

ところで、本誌は科学技術振興機構の電子ジャーナル公開システム (J-STAGE)*において

<http://www.jstage.jst.go.jp/browse/eier/-char/ja/>

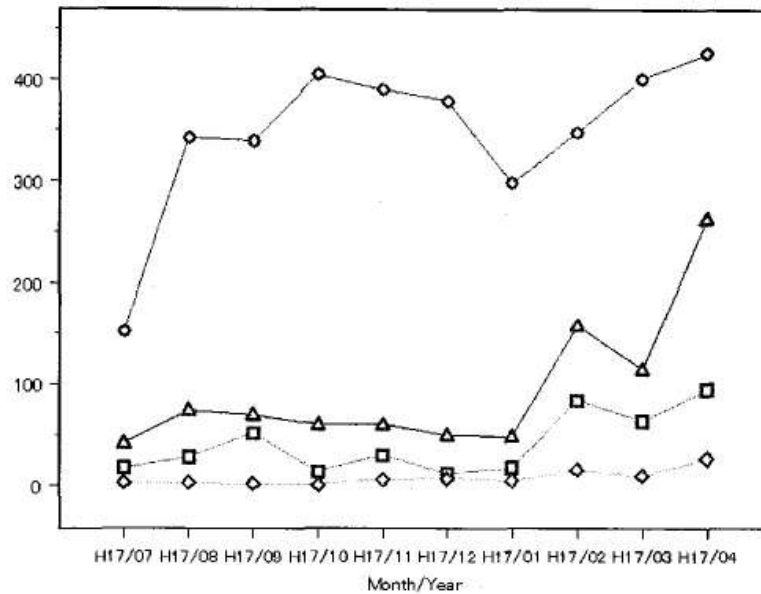
上で公開され、抄録 (引用文献画面を含む) ならびに本文ともに無料でダウンロードできます。この J-STAGE へのアクセスは全世界からのアクセスが毎回詳細に記録され毎月報告されます。実は、この J-STAGE へのアクセス件数の遷移こそが本誌にたいする「客観的評価」の一つの指標となっております。

以下、簡単ですが、最近ほぼ 1 年間のアクセス件数の概要をご紹介します。国内外の本誌にたいする状況をご報告いたします。今回、ご報告するのは、「J-STAGE の本誌トップページにたいするアクセス総数」、「論文ダウンロード総数」、「日本からのダウンロード総数」、「EU 地域からのダウンロード総数」の 4 点です。すべて月単位の件数で、平成 17 年 7 月から平成 18 年 4 月までの経過のグラフと表を掲載しています。

本誌がこのシステムのデータを享受できるようになったのは昨年 5 月からですが、昨年 6 月には中国からの異常なアクセスが記録されておりました。そのため、今回のグラフでは昨年 6 月以前のデータを省いております。このように一部の地域からのアクセスが不定期ですが急増することがあります。

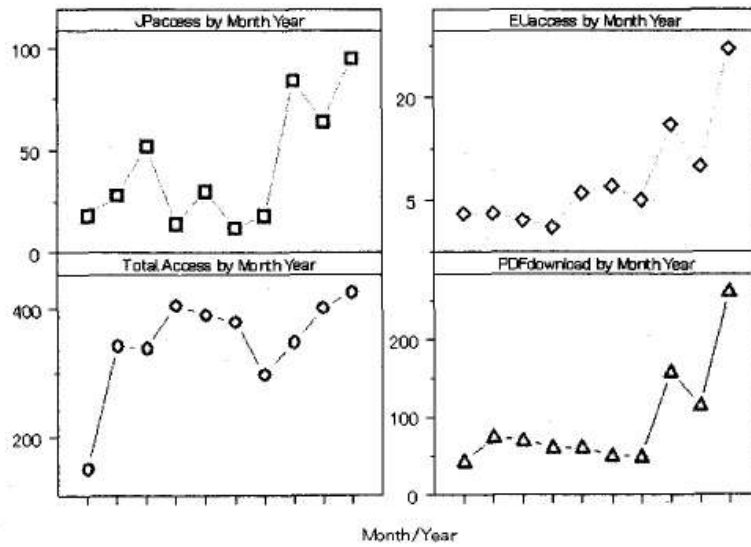
さらに、ジャーナルの質評価で一番重要視されるのが、他誌からの「被引用回数」です。まだ第 2 巻まで計 4 冊しか刊行されていないという初期の段階でもあり、残念ながら件数ゼロです。

なお、本誌内部での引用はHodgsonとLawsonとの相互引用の2回です。



	Top	PDF	JPAccess	EUAccess
H17/7	152	42	18	3
H17/8	342	74	28	3
H17/9	339	70	52	2
H17/10	405	61	14	1
H17/11	390	60	30	6
H17/12	379	50	12	7
H18/1	298	49	18	5
H18/2	348	158	84	16
H18/3	401	115	64	10
H18/4	426	263	95	27

また次のグラフは上記の4点についてのそれぞれ個別のグラフを表示したものです。一番右端の数値は平成18年4月を表示しています。この数値は本誌第2巻2号が公刊の直後のためか急増しています。まだ絶対件数は少ないものの、ヨーロッパEU地域からの関心(EUaccess)が次第に高まっていることが読み取れます。地域別件数は論文をダウンロードした件数であり、単にカバーページを見た件数ではありませんので、実質的に本誌に関心をもった指標と見る事ができるでしょう。



最後に、前号と同じお願いを申し上げます。引き続き、下記をお願いいたしますのでご協力ください。

会員のみならずから投稿を歓迎します。論文（10,000語以内）だけでなく、ノート（3000語以内）では、研究成果の摘要、資料、提案、批評などを含めて投稿を受け付けます。投稿受付後3ヶ月以内に採否をお伝えします。

また、所属大学その他図書室などでの予約購入を働きかけてくださるようお願いいたします。1年1巻（2号）で国内7000円、国外60USDです。第1巻に遡ってのご注文も可能です。国際文献印刷社内の進化経済学会事務局にお申し込みください。

* [J-Stage とは?] 科学技術振興事業団 (JST) による、日本国内の科学技術情報関係の電子ジャーナル発行を支援するシステムです。J-STAGE 上の論文は、ChemPort, PubMed, CrossRef を経由し、海外の様々な電子ジャーナルサイト上の論文と相互にリンクされます。J-Stage は Google とも連携しています。

『「博士論文」NOTES』のお知らせ

進化経済学会会員の皆様

進化経済学会英文雑誌 Evolutionary and Institutional Economics Review (EIER) は、おかげさまで順調に編集が進み、Vol.2 No.2 が出版されました。Vol.1 では、主に、進化経済学会の会員による進化経済学の進む方向に関する論文を掲載してきました。Vol.2 では、主に、海外の著名な学者の専門的な論文を特集という形で掲載してきました。今後、多くの会員の研究成果を掲載できるような様々な企画を交え、今まで以上に良い雑誌となるように、編集委員一同、頑張りたいと思います。

さて、そのための第一弾として、『「博士論文」NOTES』という企画を用意しました。現在、EIER では、(1) 独創性・一般性を持つフルペーパーである ARTICLES (2,000-10,000 語)、(2) 新しい知見を簡潔にまとめた NOTES (3,000 語以下) という 2 種類に分け、投稿論文を応募しています。編集委員のこれまでの経験に照らして、博士号取得前後の若手研究者の投稿論文の多くは、(1) としては採択に及ばないが、(2) なら採択できるものがありました。また、昨今、若手研究者もアカデミック・パスの早い段階で、査読付き英文学術雑誌の業績を求められることも少なくありません。

そこで、EIER 編集委員会は、進化経済学会会員で、博士号をした直後の、主として若手研究者を想定して、博士論文の最も重要なエッセンスを簡潔にまとめて、NOTES として投稿することを推奨いたします。もちろん、NOTES といえどもレフェリーによる査読制をひきますので、掲載は保障されません。しかしながら、育成的な見地から、ARTICLES よりも迅速な査読・編集を実施することも検討していきたいと思います。『「博士論文」NOTES』に掲載されたからといって、その後、より広く深い内容を持つならば、ARTICLES に投稿することを妨げるものでもありません。

投稿の際は、(1) 『「博士論文」NOTES』としての投稿である旨明記したカバーレター、(2) 博士号取得までの学歴、業績、指導教授などがわかるような略歴書を添付して、(3) その他は Instructions to Authors を参考にして、論文を事務局に送付してください。

2006 年 6 月

Evolutionary and Institutional Economics Review 編集長 有賀裕二

Call for Papers

進化経済学会第11回大会 報告募集

開催日時: 2007年3月24日(土)・25日(日)

開催場所: 京都大学百周年時計台記念館国際交流ホール(予定)

(京都市左京区吉田本町, 京都大学吉田キャンパス内)

テーマ: 組織・制度の進化——新しい10年に向けて

1997年の京都での創立大会から10年が経過しようとしています。この間の、進化経済学会の活動の成果は、『進化経済学ハンドブック』などの学会編集の書籍や機関誌『Evolutionary and Institutional Economics Review』などにまとめられています。今回の大会から、進化経済学会は次の新しい10年を迎えます。これまでの成果をふまえて、今回の大会が、進化経済学の新たな展望を切り開く契機となることを願って、上記のようなテーマを掲げました。折しも、日本経済も新しい段階に移りつつあるように見えます。この間の日本経済の制度や組織の進化を検証し、分析する報告も期待しています。もちろん以上のことは皆様方の応募論文のテーマを制約するものではありません。

口頭発表セッションの区分と名称は、応募受付終了後に確定しますが、応募のご参考までに以下のテーマを挙げさせていただきます。

- (1) 進化と経済思想
- (2) 制度進化への経済史的アプローチ
- (3) 社会経済の進化

- (4) イノベーション・システム
- (5) 構造変化と技術革新
- (6) 制度と政策
- (7) 制度と知識
- (8) 制度設計とガバナンス
- (9) 貨幣・金融システムへの進化経済学的アプローチ
- (10) 日本経済、日本企業への進化経済学的アプローチ
- (11) U-Mart
- (12) 社会経済実験
- (13) 進化ゲーム
- (14) 経済物理学
- (15) マルチ・エージェント・シミュレーション
- (16) レギュレーション・アプローチ
- (17) コンバンション・アプローチ
- (18) 自由論題

応募要領

報告希望者は、①希望するセッション区分番号と区分名、②要旨(A4用紙2枚程度、キーワードを3ないし5個付けてください)を、9月25日(月)までに、第11回

進化経済学会大会運営委員会事務局長宇仁宏幸(uni@econ.kyoto-u.ac.jp)宛に、Eメールでお送りください。

採否の決定は10月はじめまでに行い通知します。なお現在、非会員であっても学会加入の意思があれば応募を受理いたします。採択された方は、2007年1月8日(月)までに、『進化経済学論集11』に掲載するA4版20ページ以内の原稿(pdfファイル、またはMicrosoftWordのdocファイル)を大会運営委員会事務局長宇仁宏幸(uni@econ.kyoto-u.ac.jp)宛に、Eメールの添付ファイルでお送りください。

(Eメールには、受信した旨を返信いたします。送信後3日経過しても返信のない場

合には、お手数ですが再度確認のメールをお送りください)

(今回の大会では、『進化経済学論集』の冊子版は作成せず、CD-ROM版での配布のみとします。また、掲載原稿の枚数制限はこれまではA4版10ページでしたが、A4版20ページに緩和します。pdfファイルでの原稿送付を推奨します。MicrosoftWordのdocファイルの原稿については、運営委員会が機械的にpdfファイルに変換します。)

ポスターセッション

ポスターセッションを予定しています。詳細は追ってお知らせいたします。

第11回進化経済学会大会運営委員会

委員長：吉田和男(京都大学) yosida@econ.kyoto-u.ac.jp

事務局長：宇仁宏幸(京都大学) uni@econ.kyoto-u.ac.jp

大会ホームページ <http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~uni/11thmeeting.html>

2006年度進化経済学会サマースクール開催のお知らせ

2005年度進化経済学会オータムコンファレンス(北海道大学)で開催された『進化経済学サマースクール』を今年も開催します。本サマースクールは進化経済学会会員(特に若手会員)の学会活動を促進するために、普段は交わることのない研究者間の交流を深め、知識の共通基盤を構築し、さらに内容を深めていくことを目的としています。もちろん参加資格の制限はありません。

日時：2006年9月28日または29日の1日または両日

会場：京都大学 京大会館(予定)

(参加者には京都大学21世紀COEプログラムから宿泊補助あり。

9月29日は京の夜を楽しむ懇親会も予定しています。)

今年『進化経済学会の次なる挑戦』と題して、進化経済学会が学会として取り組むべきテーマは何か、そのための有効なアプローチは何か、皆で議論しましょう。具体的には、先ず、モデレーターに問題意識を説明してもらい、それから、フロアで自由討議する参加型セッションを幾つか用意する予定です。例えば、『進化経済学における「合理性」』というようなテーマで、標準経済理論の仮定する経済人、経済心理学の提唱する限定合理性、そして進化経済学が扱うべき合理性について、意見交換したいと思います。つきましては、サマースクールのモデレータとテーマを自由公募します。このようなテーマで議論したいという意見がありましたら、どのようなものでも結構ですから、7月15日までに、サマースクール担当 京都大学経済学部 依田高典 (ida@econ.kyoto-u.ac.jp) まで、お知らせ下さい。追って、8月に会員の皆様に最終の案内をする予定です。

オータム・コンファレンスのご案内

『進化経済学ハンドブック』刊行を機に、また進化経済学会創立10年を機に、進化経済学の現在の到達点と今後の展望について、多角的に、議論したいと考えています。下記の5名の方の報告と討論をもとにして、進化経済学の多様な可能性が明確になることを期待しています。ご参加よろしくお願ひします。

日時・場所 2006年9月30日(土) 13~17時 京大会館 210号室

進化経済学の到達点と展望

- ・塩沢由典(大阪市立大学) : 進化経済学の競争力
- ・萩原泰治(神戸大学) : シュンペーター学派の現状
- ・蔵琢也(京都大学) : 進化生物学と進化経済学
- ・磯谷明德(九州大学) : 進化経済学における制度問題
- ・藤本隆宏(東京大学) : 実証社会科学の進化論的枠組み

(17時半から 211号室で懇親会を行います)

京大会館(〒606-8305 京都市左京区吉田河原町 15-9 TEL (075)751-8311)の場所については、<http://www.kyodaikaikan.jp/access.html>をご覧ください。

<<ニューズレター編集担当から>>

国際学会参加記や書評などニューズレターに掲載していく予定です。掲載希望原稿に関するお問い合わせは sawabe@econ.kyoto-u.ac.jpまでお願いします。